Japanese association of educational psychology



# 体験の質と創造性

弓野憲一
(静岡大学教育学部)

## 1．はじめに

新学習指導要領では、「体験」や「活動」を重視して、児童生徒に「生きる力」つけさせることを求めている。「生きる力は、いかに社会が変化しようとも、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や、感動する心など、豊かな人間性である。」創造性研究の観点に立つと、上記の内容は、多くの点において「創造性の育成」と重なり合う。上記の「生きる力」を育むためには、現在の学校で重要視されている児童・生徒の各種の体験がキーポイントになるであろう。しかし児童・生徒のどのような発達段階で、どのような体験が必要なのであろうか？ そしてそれはなぜ必要なのであろうか？ このような問い掛けに対して思弁的な理由はいざ知らず、これに十分に答える実証的な研究を見つけ出すのは内外において難しい。本研究では、大学生の小・中・高校時代の自主的におこなった体験を調べ、それと「創造的態度」および「創造性」がどのように関連しているかを調査した。

## 2．方法

**被験者**　教育学部3年生　100名

**調査用紙**　(1)**創造性テスト1**　トーランスより取られた「氷上でつりをしているような3人組み」の絵について、①この絵のなかで何がおこっているかを知るための質問、②何が原因でこうなったかを知るための質問、③これから起きることの予測(その理由)を10分間自由に書かせた。(2)**創造性テスト2**　「空きカン」の利用法についてのアイデアを10分間書かせた。(3)**体験調査表**　宿題ではなく自主的に「1．詩や物語りを書いたことがある、2．新しいゲームを考えたりゲームのルールを変えたことがある、3．電化製品、自転車、実験機具等を修理したことがある、自分で計画して旅行したことがある、28.海・山・川等の自然の中で遊んだことがある、・・・・」以上のような30項目の体験を小・中・高・大学時代にどれほどやったかを5段階評価で答えた。(4)**創造的態度調査表**　「1.たとえ話しがうまい、2.確固たる意見を持っている、3.よく空想する、・・」の43項目。5段階評価で答えた。

## 結果

重回帰分析を使って、創造性テスト1の①の全質問数を体験項目より予測すると、全体としては有意な項目はなかったが、②の質問数は、a)自分で旅行計画して旅行したことがある、b)劇を演じたり、劇のメンバーを指導したことがある、c)オリジナルな料理を作ったことがある、d)スポーツや運動において自分に合った練習計画を立てたことがある、e)電化製品・自転車・実験器具等を修理したことがある、が説明変数として有意であった。

創造性テスト2と体験項目の間には、f)空き缶や空き箱で何か役立つものを作ったことがある、g)わからないことを確かめるために実験を計画したことがある、ならびに上記 e)が説明変数として、有意な傾向が見られた。

創造的態度の総得点と体験の総得点の間には、.36 の相関があった。好奇心に関する創造的態度得点と体験の総得点の間にも、.34 の有意な相関があった。

## 考察

体験のなかでも、上記したいわゆる「創造的体験」が創造性と関連していることがわかった。「生きる力」を育む教育プログラムの開発においては、この点に留意する必要があろう。さらに、創造性の育成には、好奇心を伸ばすような配慮も必要であろう。



NII-Electronic Library Service